

Card Magic Magazine



No. 29

July 4, 2014

by Hideo Kato

カードマジック徹底研究

コレクターズ

‘コレクターズ’の現象は、複数の客が選んだカードが、同時にサンドイッチ状態になるというものです。原案者はロイ・ウォルトンとされていますが、現象自体はかなり以前に存在していました。ウォルトンが‘コレクターズ’という名称で発表してから、有名なジャンルとしてとらえられるようになりました。

‘コレクターズ’の現象は、分類するほど多くの変種がありませんから、年代順に収録することにいたしました。私が見つけた中で、もっとも古いコレクターズ現象の作品の紹介から始めます。

バーグラーズ

= オーヴィル・メイヤー、“カードマニピュレーションズ”、1938年 =

このトリックは1938年に書かれていますが、その時点で、“この種のトリックは数多くのバージョンがある”と書かれています。

* 方法 *

3枚のJが泥棒で、1枚のKが刑事だと言って、Kを1枚と黒いJを2枚と赤いJを1枚抜き出して、3枚のJは裏向きにテーブルに置きます。それらを見つける動作の中で、1枚のKをトップに、ボトムからK、赤いJ、Kとセットします。

デッキを裏向きに左手に持ちます。「泥棒はばらばらに逃げました」と言ってから、3枚のJを取り上げ、広げて表を見せ、黒いJをボトムに入れます。そして左手を返してボトムカードを見せます。つぎに赤いJをデッキの中央に入れます。そして最後の黒いJをトップに置きます。

「刑事が泥棒を追いかけてきました」と言って、ボトムに入れます。そして1回カットします。「1人の刑事で3人の泥棒を捕まえるのはたいへんです。ですから刑事は仲間の刑事を集めました」と言って、カードを表向きにスプレッドします。「そしてうまく泥棒は捕まりました」と言って、Kの間にはさまっているJを見せます。

クラブサンドイッチ

=ミルトン・ミラー、雑誌”ヒューガードマジックマンズリー”、1949年6月=

* 方法 *

2人の客に1枚ずつ選ばせ、トップから2枚目とボトムにコントロールします。客にカードを取らしたとき、そのカードを見ておぼえながら、それがサンドイッチのハムだと想像してくれと説明します。サンドイッチを作るには、パンも必要だといって、ボトムからカードを引き抜きますが、グライドして2枚目を抜き出します。そのカードの表を見せ、表向きにして元の位置、すなわちボトムから2枚目に入れます。

トップカードを表向きにして、これもパンだと言います。ダブルリフトしてそのカードの下に客のカードを重ねて、ボトムにまわします。もう1枚パンを使うといって、トップカードを表向きにします。そしてデッキを1回カットします。

カードを手から手に飛ばすスプリングのフリリッシュを行います。そして「カードが集まったのが見えましたか」と言います。カードを広げて、表向きのカードが集まって、裏向きのカードをはんさでいるのを見せます。それら5枚をアップジョグし、2人のカードを名乗らせてから、手を返して2枚のカードの表を見せます。

コレクターズ

=ロイ・ウォルトン、雑誌”アブラカダブラ”、1969年2月15日号=

これが’コレクターズ’という名称をつけて発表された、ウォルトンの最初の’コレクターズ’作品です。このバージョン自体は、ウォルトン作品として残すレベルとは感じませんでした。このバージョンをもとにして改案した”デヴィルズプレイング”の’ファインダーズキーパーズ’が、どのようにしてプロセスが改良されたかを見ていただくために、収録しておくことにいたしました。

* 準備 *

あらかじめおぼえやすいカード(ジョーカーとかスペードのAなど)をデッキの中央に入れておきます。説明上、ジョーカーをセットしたとします。

* 方法 *

カードを表向きに広げ、Kが出てきたら左手のカードのフェースにくるようにカットして、右手でそのKを右手のカードの下につかみ、右手を返してKを裏向きにテーブルに置きます。この動作をあと2回繰り返して、合計3枚のKをテーブルに出します。以上のようなKの出し方は、これから

行うフォールスムーブの伏線です。

「おぼえやすいカードを1枚使います」と言ってカードを広げ、ジョーカーが出てきたらジョーカーが左手のカードのフェースになるように分け、ジョーカーとその下のカードをダブルプッシュオフし、先ほどと同じように右手でつかみ、右手を返してジョーカーの上にある無関係カードをテーブルのKの右に置きます。ジョーカーを置いたように見せるのです。

そのあと右手のカードをもとの向きに戻し、右手のカードを左手のカードの下に入れ、全体を裏向きにして、そろえつつトップから2枚目の下にブレイクを作ります。

右手で3枚のKを取り、表向きにしてトップにのせますが、すぐにブレイクの上の2枚を下に加えます。そしてそれをそろえる動作で、5枚のボトムカードの上に右親指でブレイクを作ります。5枚の表に左親指をあてて、そのカードをデッキのトップに取りますが、少しアウトジョグした位置に取ります。2枚目のカードを引いて取りますが、ブレイクの下に1枚を同時に置いてしまいます。位置はデッキにそろえ位置です。そのとき、2枚のカードの間にブレイクを作ります。そして残りの2枚を少しインジョグした位置に置きます。

カードをそろえて、ブレイクから上の3枚を取ります。その3枚をカードケースの上ののせます。これはあとですぐにカードを取り上げられるからです。デッキを表向きにしてヒンズーシャフルの位置に持ち、いちばん下のカードを押し下げて、右手でそのカードより上のカードをかなり多く抜きとつて、ヒンズーシャフルを始めます。

そして相手に好きなところでストップをかけさせます。ストップがかかったら、左手のカードのフェースのカードを相手におぼえさせます。そして右手のカードをのせてそろえますが、相手のおぼえたカードの下にブレイクを作ります。そしてデッキを裏向きに戻しつつ、インビシブルパスでブレイクよりパスします。

テーブルからジョーカーと思われるカードを取り、デッキの中央に入れ「私のカードもあなたのカードと同じようにまん中へんに入れます」と言います。ケースの上ののせたカードを取り、トップにのせ、マジカルジェスチャーをかけてから、トップの5枚を広げます。そして、3枚のKの間にはさまっているジョーカーを抜き出して見せ、つぎに相手のカードを再確認してから、それを抜き出して見せます。

ファインダーズキーパース

= ロイ・ウォルトン、" デヴィルズプレイシング "、1969 年号 =

* 方 法 *

デッキからクラブのA、2、3を抜き出して、表向きにテーブルに置きます。3がいちばん上にあります。

デッキを裏向きにして、トップから3枚目の下にブレイクを作ります。テーブルから表向きの3枚を取り、表向きのままデッキのトップに置き、そろえて6枚を取り上げます。そのとき6枚目の上にブレイクを作ります。

クラブのAから3の3枚を使うと言って、左手のカードのフェースからクラブの3を引いてデッキの上に取りますが、2cmほどアップジョグした状態に取ります。クラブの2を引いてクラブの3の上に取ります。右手の残りのカードをクラブの2の上ののせます。ブレイクは左手の小指が引き継ぎます。

右手でカードをつかんで手前に引き、ブレイクより下の3枚はデッキにそろえてしまい、ブレイクより上の3枚を取ります。そしてその3枚をテーブルに置くか、あとで取りやすいようにケースの上に置きます。裏面が露出しない範囲で3枚をずらして置きます。

デッキを表向きにして、バックのカードの上にブレイクを作ります。ヒンズーシャフルすべく右手で下側のカードを抜きますが、ブレイクの下1枚はバックに残します。少数枚ずつ左手にシャフルしていき、1人目の客にストップをかけさせます。

ストップがかかったら左手のフェースのカードを相手におぼえさせ、右手のカードをオベットのマスタームーブ（ボトムプレイスメント）の位置に持ち直します。左手のフェースのカードを右手のカードの下にそろえる振りをして、マスタームーブによって右手のカードの下から2枚目にすべり込ませますが、半分ほど左に突き出させておきます。

現在の左手のフェースのカードを少し右に押し出して、2人目の客におぼえさせます。そのカードの上に右手のカードをのせてそろえるとき、2人目のカードの下にブレイクを作ります。カードを裏向きに戻すとき、ターンオーバーパスを行います。デッキをテーブルに置きます。

テーブルに置いてある3枚のカードを取り上げ、左手に持ちます。そのときクラブのAの下にブレイクを作ります。右手でデッキを取り上げ、左手の3枚の上ののせます。クラブの3枚を中央に運ぶといって、右手でデッキの上半分をカットし、それを下に入れるとき、ブレイクの中に入れてしまいます。これで2人のカードは、クラブの3枚の間にはさまりました。

カードをスプレッドして、クラブの3枚の間に裏向きのカードがはさまったのを見せ、それら5枚のカードを抜き出して、2人のカードを名乗らせてから、裏向きのカードを表向きにします。

ワンアットアタイムコレクターズ

= アレックス・エルムズレイ、雑誌“パピュラー”、1974年11月 =

* 方 法 *

4枚のAを抜き出してテーブルに置きます。

3人の客に1枚ずつ選ばせ、トップにコントロールします。トップから3枚目が1人目のカード、トップが3人目のカードになるようにコントロールしたとして説明します。コントロールのやり方によっては、違う順になることがありますので、それなりにのちほどの当てる順番で調節してください。

トップの3枚の下にブレイクを作ります。テーブルから4枚のAを取り上げ、表向きにトップに置き、「3人のカードを見つけるのにこれらのAを使います」と言って、広げて見せ、そろえるときに下の3枚をアディクションして、7枚を右手に持ち、デッキは使わないのでわきに置きます。

7枚を左手のディーリングポジションに持ち、上から1枚ずつ3枚プッシュして逆順になるように取っていき、最後の4枚はまとめて右手のカードの上に置きます。カードの厚さをカバーするために、左手の人さし指を前のエッジに沿って保持します。

パケットを縦に返して裏向きにして、またディーリングポジションに持ちます。上の2枚を右手に広げて取り、それらに注目を集めながら、「AとAの間にカードがはさまります」と言います。右手の2枚を裏向きに左手のカードの下に入れてそろえます。

トップから3枚目の下にブレイクを作ります。3人目のカードを名乗らせます。カードに魔法をかけ、ブレイク上の3枚を1枚として右手で取り、つぎの表向きのカード(3人目のカード)を右手のカードの上にアップジョグして取り、つぎの1枚をその上に取ります。

左手に残っている2枚の上のカードをプッシュして、左手を返して2枚の表を見せ、裏向きに戻します。そのとき右手は3枚重なっているうちのいちばん下の1枚をバックルし、左手の2枚をその割れ目に入れて、カード全体をそろえます。アップジョグカードもそろえます。

1人目のカードを名乗らせます。カードに魔法をかけてから、1枚目の裏向きのカードを右手に取って、つぎの表向きのカードをその上にアップジョグして取り、つぎの裏向きを取り、つぎの表向きのカード(1人目のカード)をアップジョグして取り、つぎの1枚をその上に取り、そして残りのダブルのカードをそれらの上ののせて、全体をそろえます。

2人目のカードを名乗らせてから、魔法をかけ、こんどはいっぺんにカードを両手の間に広げ、3人のカードがはさまれているのを見せます。

L.J. コレクターズ

= ラリー・ジェニングス、雑誌“エピローグ”、1976年 =

* 方法 *

4枚のKを抜き出し、表向きに赤、黒、赤、黒の順でトップにのせ、広げてよく見せます。そのとき下の裏向きの3枚も広げ、そろえるときに7枚をそろえてしまい、右手の親指はさらにその下の1枚を持ち上げて、間にブレイクを保持して、合計8枚のカードを取り上げます。

左手の親指でKをデッキのトップに引いて取っていきますが、3枚取ったら右手の残り4枚をその上にそろえる振りをして、上の4枚だけを取ってテーブルの右の方に置きます。少しカードがずれるようにして置きます。上の1枚のみがKで、下の3枚は裏向きの無関係カードです。デッキのトップには、裏向きの無関係カードの下に3枚の表向きのKがあります。

デッキの上から3分の1ぐらいをカットし、それを残りのカードの中にファローシャフルのように差し込み、半分ぐらいさし込んだところではさまったカードを引き抜きます。引き抜いたカードをトップにのせ、カードをそろえます。これによって表向きのKが3、5、7枚目に配置されます。

ナチュラルブレイクを利用して、トップから5枚目のカードの下にブレイクを作ります。デッキのまん中へんからカードをカットして、下半分を上半分の上ののせますが、先ほど作ったブレイクを維持します。ここで1人目の客に向かい、カードをボトム側からリフルしていき、ストップがかかったところから分ける振りをしてブレイクから分けてしまう、リフルフォースを行います。左手のカードを縦に持ち、トップカードを右押し出して、相手にそのカードをフェースを見せておぼえさせます。右手を下げる時、そのカードを引いて表向きのカードをカバーします。

右手のカードを左手のカードにのせ、右手のカードのボトムの2枚をはじいて落とし、そこにブレイクを作ります。そして先ほどと同じようにリフルフォースで2人目の客にカードをおぼえさせます。カードをそろえるとき右手のボトムから2枚落とし、3人目の客にも同様にカードをおぼえさせます。3人目のカードの上にブレイクを作り、そこからアンダーカットします。

デッキをいったんテーブルに置き、まん中からカットして上半分を左手に持ちます。そしてナチュラルブレイクを利用してトップから6枚目のカードの下にブレイクを作ります。右手で初めにテーブルに置いた4枚のKと思われるカードを取り、「皆さんのカードはこちらにあるかも知れません」と言いつつ、右手のカードでそのパイルをたたき、いちばん上のK以外の3枚をそのパイルのトップに捨ててしまいます。そして「こちらの中にあるかも知れません」と言いつつ、右手の1枚で左手のカードをたたきつつ、ブレイクより上の6枚をスチールします。

これで三人がおぼえたカードはKの間にはさまっていますから、7枚を広げ、相手のカードをたずねてから裏向きのカードを見せていきます。

* 備 考 *

ファローしてカードを抜き取る部分は、非常に'嫌らしい'部分で、どうい許容できる動作ではありません。たんにファローしてそろえるときに右手のカードのトップカードであったカードの上にブレイクを作ればよいのです。

もうひとつ、テーブル上のパイルのトップに余分なカードを捨て、手元のパイルから6枚取るという部分を、ジェニングスはカードをさり気なくタップする、という動作の中で秘密の動作として行っています。彼の他の作品でもそうですが、彼のマジックは秘密の動作をテクニックで解決する、という傾向があります。そのへんが、彼のマジックは彼がやればみごとに見えるが、私たちがやっても消化不良に終わる、ということになるようです。

私はもともと難しいテクニックをなるべく使用しないで演じたい、という願望がありますので、難しい部分を堂々とやるができるように、話とかプロセスを組み立てる、という手法で解決しようします。このマジックの場合、4枚のKが'吸取り紙'であるとして演じます。パイルの上にカードを押し付け、客のカードを吸い取る、といって捨てる方とスチールする方を堂々とやるのです。

ツイステッドコレクターズ

= J.C. ワグナー、" スーパーマジック "、1977 年 =

4枚のAでツイスティングエースの現象を行ったあと、4枚のAの間に3人の選んだカードがはさまります。私は技法としてコレクティングカウント(18 ページ)を考えましたが、このトリックの中には別のやり方のコレクティングカウントが含まれています。

* 方 法 *

4枚のAを表向きにダイヤ、クラブ、ハート、スペードの順にテーブルに置きます。3人の客にカードを1枚ずつ選ばせ3人のカードをトップにコントロールします。

右手で4枚のAを取りにいきつつ、左手はトップから3枚目の下にブレイクを作ります。そして4枚のAをトップにのせてそろえ、ブレイクの上の7枚を取り上げ、デッキはわきに置きます。

7枚を左手に持ち、右手に1枚ずつ取っていきます。3枚まで取ったら、残りの4枚をまとめて右手のカードの上に取ります。カードをひっくり返し、エルムズレイカウントを行って、4枚のカードの裏を見せます。ポケットを左手に持ち、左手の甲を上に向けとポケットをひっくり返し、親指で上に押し出して右手で取ります。

ツイスティングムーブを行ってから、エルムズレイカウントします。表向きになったAを少しアウトジョ

グして置きます。アウトジョグされたAの下のカードを右手で抜き出し、それをトップにのせつつ左手の人さし指で表向きのAをカードにそろえます。

ツイステイングムーブののち、エルムズレイカウントを行います。以上の動作を繰り返してハートのAが表向きになるまで行います。ハートのAを現すカウントに置いては、最後のカードをトップではなく、ボトムカードに入れます。そのカードの上にブレイクをつくります。ハートのAの下の裏向きのカードを右手で抜き出しつつ、左手の人さし指でハートのAをカードにそろえます。右手で抜いた裏向きのカードをボトムカードの上に入れ、ボトムから2枚目のブレイクを継続します。

ブレイクを右手の親指に移してカードを右手のビドルポジションに持ちます。それから表向きに戻った4枚のAを見せつつ、Aの間に3枚の選ばれたカードをはさみます。1枚目のAを左手の親指で引いて取り、2枚目を取るときブレイクの下に2枚のうちの下に1枚を左小指でプルダウンして、2枚目のAの下に置いてきます。3枚目を取るとき、ブレイクの下に1枚を置いてきます。そして最後は2枚をいっしょに置きます。

ツイステイングモーションを行い、カードを広げて3人のカードを現します。

* 備考 *

この解説の中のコレクティングカウントでは、1枚目にはさむカードを左小指でプルダウンせよ、となっていますが、どうしてももたついてしまいます。私の方法で代用することをおすすめします。小指でプルダウンする代わりに、右親指でリリースする方法もありえます。

コ・レクターズ

= ジェリー・ハートマン、“カードフェア”、1980年 =

この作品は、表向きの4枚のカードと選ばれた3枚のカードが離れた状態で、どちらかが飛行してコレクト状態になるという、'クロスタウンコレクターズ'と呼ばれる現象です。

* 方法 *

4枚のJを抜き出して、表向きにデッキのトップに置きますが、Jの下に3枚の裏向きのカードをアディクションし、しかもあと1枚の裏向きのカードをスチールして、マルローのフェイスアップチェンジの体勢をとります。(その1枚の上にブレイクを作るのか、サイドジョグするのか書かれていませんが、ブレイクだと以下の説明通りにやるのは無理があります)。

右手のカードの上から1枚を引いてデッキのトップに取り、つぎのカードを引いて1枚目より右にずらして取り、3枚目もずらして取り、残りのカードをいったん3枚目より少し右に位置させてから、すべてのカードをデッキのトップにそろえつつ、右手は上の4枚だけを取り、下の4枚はトップに

残します。4枚の表向きのJを見せたあと、そろえて右手に取ったように見せるのです。

左手を返してデッキを表向きにしてテーブルに置き、左手をカードから離さずに上の28枚ぐらいをカットして持ち上げます。(テーブルに表向きに20枚ぐらい残すということです)。左手のカードを裏向きにします。

右手の4枚を左手のポケットの上へのせ、ボトムの8枚ぐらいをトップにカットしてまわします。このポケットを裏向きにテーブルの右の方に置きます。

表向きのポケットを取り上げ、裏向きに左手に持ちます。ナチュラルブレイクを利用して、表向きの3枚のJの下にブレイクを作ったのち、1枚のJを落とし、その上にブレイクを保持します。

ポケットの左上コーナーをリフルしますが、表向きのJのあとからリフルを開始します。そして相手にストップをかけさせます。ストップがかかったところでカードを分けて、下半分を上まわしてそろえます。「ストップがかかったところの3枚を使います」と言います。

ブレイクを左小指に移し、右手はトップカードを取り、1人目の客にそのカードの表を見せ、記憶させます。そのカードをポケットの中に入れますが、ブレイクの中に入れ、入れたらすぐにブレイクを解消して、そのカードがポケットの中央に入れられたのがよく見えるような角度に向け、そのカードを完全に中に押し込みますが、手をもとの位置に戻しつつ、押し込んだカードの上にブレイクを作ります。そしてブレイクの上の1枚のJをドロップし、ブレイクをそのJの上に保持します。

トップカードを右手に取り、2人目の客に見せます。まえと同じようにして、それをブレイクの中に入れ、1枚のJをドロップします。3人目の客にも同様に行います。3人目のカードをブレイクに押し込んだあとは、1枚をドロップせずに、そのカードの上にブレイクを作ります。そしてブレイクからダブルアンダーカットを行います。このポケットをテーブルの中央に置きます。

右の方に置いてあるポケットを取り上げます。ナチュラルブレイクを利用して表向きのJの下にブレイクを作ります。この状態でブラウエリバーサルを行います。すなわち、ブレイクより下のカードの下の半分をカットし、表向きに返して右手のカードの上へのせます。それからブレイクからカットして表向きにし、右手のカードの上へのせます。

いま持っているポケットをテーブル中央に置いてあるポケットの上に重ね、上からたたいて魔法をかけます。そしてナチュラルブレイクを利用して表向きのカードと最初の裏向きのカードのところで分け、持ち上げた表向きのカードを前の方でリボンスプレッドして、そこにJがないことを示します。

裏向きのポケットをリボンスプレッドしますが、トップ近くをより広く広げるようにして、サンドイッチ部分が中央にくるようにします。あとは客のカードを名乗らせてから、サンドイッチの中から客のカードを抜き出して見せていきます。

トラップーズ

＝ジェリー・ハートマン、“カードフェア”、1980年＝

ジェリー・ハートマンは、エルムズレイの‘ワンアットアタイムコレクターズ’のテーマに刺激されて、このマジックを考案したと述べています。パリエーションというよりも、十分に独立したマジックになっていると思います。

* 方法 *

4枚のAを抜き出してテーブルに表向きに置きますが、いちばん上といちばん下を赤いAにします。つぎに、トップから2, 3, 4, 枚目のカードを表向きにしますが、手っ取り早いのは、ブラウエリバーサルを使うことです。すなわち、トップの3枚の下にブレイクを作り、デッキのまん中へんからカットし、下半分を表向きにしてトップにのせます。それからブレイクの下カードを表向きにして上にのせます。これでいちばん下に3枚のカードが裏向きになりましたから、あとはフェースの1枚をダブルカットで下にまわします。そしてデッキを裏向きに持ちます。

表向きのカードを露見させないように、3人の客に1枚ずつ取らせませす。まだ表を見ないで、テーブルに置かせませす。トップから3枚目の下にブレイクを作ります。これはこれからティルトを行うためのものです。

1人目のカードを取り、そのカードの表を1人目の客に見せておぼえさせ、裏向きにしてティルトによってブレイクの中に入れます。そして1枚の表向きのカードをドロップします。そして2人目のカードを2人目の客におぼえさせてから、裏向きにブレイクに入れ、1枚ドロップします。3人目のカードをおぼえさせてから、裏向きにブレイクに入れます。そのあとトップの1枚をダブルカットでボトムにまわします。

トップから2枚目の下にブレイクを作ります。4枚の表向きのAを取り上げて、デッキの上で広げて見せ、閉じるときにブレイクの下に2枚もいっしょにそろえます。カードに対して魔法をかけ、3人目の客のカードを名乗らせてから6枚のカードをひっくり返し、上の4枚を広げて、3人目のカードがはさまっているのを見せませす。

カードをそろえてひっくり返しますが、下にあと2枚加えて8枚の下にブレイクを作ります。2人目のカードを名乗らせてから、ブレイクの上の8枚をひっくり返し、上の5枚を広げて、2人のカードがはさまったのを見せませす。

8枚をひっくり返し、下にあと2枚加えて、10枚の下にブレイクを作ります。1人目のカードを名乗らせ、ブレイク上の10枚をひっくり返し、上の6枚を広げて、3人のカードがはさまっているのを見せませす。そのまま、上から7枚のカード(裏向きの4枚に表向きの3枚がはさまっている)を右手に取り、デッキをテーブルに置ませす。

7枚の中から表向きのカードを抜いて、テーブルにひとつの山に置き、残りの裏向きの4枚を別の山に置きます。

デッキを取り上げ、トップから3枚目の下にブレイクを作ります。「もういちど同じことをやりますが、すでに3人のカードはわかっていますから、表向きに入れます」と言って、3枚の表向きのカードのうち1枚を取り、ティルトでブレイクに入れます。1枚ドロップし、2枚目の表向きのカードをティルトで入れます。1枚ドロップし、3枚目の表向きのカードをティルトで入れます。

ナチュラルブレイクを利用して、トップから6枚目の下にブレイクを作り、ダブルカットで6枚をボトムにまわします。右手でテーブル上の裏向きの4枚をビドルポジションに持ち、ちらっとフェースのAを見せてから、裏向きに戻し、上から1枚ずつ引いてデッキのトップに取っていきます。そして「4枚のAを中ほどに入れます」と言って、デッキを1回カットします。

魔法をかけてからデッキを表向きに広げます。4枚のAとはさまれているカード、計7枚を抜き出して、7枚を広げた状態でひっくり返し、3人のカードがはさまれているのを見せます。

I.R.S. コレクターズ

= ドン・ヘイゲン、雑誌“MUM”、1983年4月 =

* 方 法 *

2枚の黒いJとジョーカーを抜き出します。残りのカードを裏向きにリボン Spreddし、Spreddを表向きに戻してから、Spreddの端に2枚のJとジョーカーを裏向きにのせます。そしてカードを閉じ、デッキを裏向きにします。Jとジョーカーは表向きにボトムに置かれました。

デッキをリフルしてストップをかけさせ、カットした上半分のボトムカードを1人の客に見せます。それを下半分に重ねるとき、マスタームーブもしくはボトムプレイスメントによって、その客のカードをボトムに運びます。2人目の客に対しても同じことを行います。現在ボトムには2人の客のカード、その上に表向きの2枚のJとジョーカーがあります。

ナチュラルブレイクを利用して、ボトムの5枚を取り、デッキをわきに置きます。つぎの方法でコレクターカード3枚を見せます。いちばん上のカードを右手で取ってはじき、いちばん下に入れますが、バックルして下から2番目に入れます。そのカードの上にブレイクを作ります。

つぎのカードを右手で取ってはじき、いちばん下に入れます。つぎはブレイクの上の2枚を取って見せ、下に入れず上に戻します。

5枚を右手に持ち、左手でデッキをまん中へんでカットして持ち上げ、間の空間で右手のカードを左右に往復させ、最後に5枚をファンに広げます。2人のカードを名乗らせてから、ファンを返して2人のカードを示します。

* 備 考 *

3枚目のコレクターカードをダブルで取って見せる部分が難しいですね。3枚を示すときに、カードを下にまわしたときに「1枚」と考えるから、そのような難しいことをやらなければならなくなります。つぎのようにやると、3枚目を下にまわす必要がなくなります。

「表向きのカード3枚を使います」と言って、いまフェースにあるカードを指さして「1枚」と言い、そのカードをバックルしたカードの上に入れ、いまフェースにあるカードを指さして「2枚」と言います。そのカードを下に入れ、フェースにあるカードを指さして「3枚」と言います。

2枚のJとジョーカーを使うというのは、私には理解できません。むしろあるマークのJ、Q、Kを使うのがよいのではないかと思います。

最初に3枚のカードをボトムに置くときのプロセスも、へんな感じがします。たんに3枚を裏向きのデッキのボトムに表向きに置けばよいと思うのですが。

以上のような弱点があるものの、このマジックは一連の'コレクターズ'バージョンの中でも、一般の観客に受けがよいマジックだと思われます。プロセスが単純ですから、最後のサンドイッチ状態の見せ方のビジュアルさによって、とても気持ちのよいマジックとなるでしょう。

たとえばハートのJ、Q、Kをコレクターカードとして使うとして、ハートの10とハートのAをリフルフォースし、結果としてハートのロイヤルフラッシュがそろい、そのあとロイヤルフラッシュをテーマにしたマジックに続ける、という演出はいかがでしょうか。

ピンカートンレディース

= ゴードン・ブルース、"ベストオブクロスアップマジック"、1984年 =

* 現 象 *

4人の刑事だと言って、4枚のQを抜き出してテーブルに置きます。犯罪者として1枚のカードを選ばせ、デッキの中に入れます。4枚のQを裏向きに持ちます。Qが1枚ずつ表向きになっていきます。4枚が全部表向きになったあと、4枚の間に裏向きのカード3枚がサンドイッチ状態に現れます。それらは犯人に似た容疑者であると言って表を見せると、犯人と同じ数のカードです。犯人はすでに捕らえられていて、監獄に入っていると言って、わきに置かれているカードケースからそのカードを抜き出します。

* 準 備 *

4枚の同数のカード(たとえば4枚のA)をボトムにセットしておきます。演技中に4枚のQを抜き出すときにカルしてもかまいません。

* 方 法 *

デッキをケースから出しますが、さり気なくケースの中にカードが残っていないことを印象づけます。ケースのフタを閉じてわきに置きますが、フタの方があなたの方にあって、三日月の切り口が上を向くように置きます。どのような向きに置くのがベストか、試行錯誤によって確定してください。

4枚のQを抜き出して表向きにテーブルに置きますが、フェースからハート、ダイヤ、クラブ、スペードとします。

さり気なくシャフルしながら4枚のAをデッキ中央に運びます。そしてどのAでもよいですから、1枚のAをフォースします。残りの3枚のAの下にブレイクを作り、カードを広げ、ブレイクの下に相手のカードを返させます。そして4枚のAをトップにコントロールします。

4枚のQが女性の刑事であると説明しながら、トップの3枚をギャングラズフラットパームします。図1。デッキを裏向きにテーブルのわきの方に置きます。



左手で4枚のQを取り上げ、表を上に向けてディーリングポジションに持ちます。ここでピーター・ダフィの技法を使って、いかにも4枚のQを裏返したと見せて、右手にパームしているカードを加えてしまいます。つぎのようにやります。



右手を左手のカードに近づけて、右手がカードをおおったとき、パームしているカードを左手のカードの上に落とします。図2。そのとき左親指はポケットの下に入れていきます。

すぐに左手はカード全体を親指で起こしてひっくり返し、右手の先でポケットの前方のエンドをつかみ、図3、



図4のように返します。そしてパケットを左手のディーリングポジションに置きます。以上の操作は、いかにも表向きの4枚のQを裏返したように見えますが、結果的に表向きのQの上に裏向きの3枚を加えたこととなります。



「ちょっとした事件では、1人の刑事が担当します」と言って、エルムズレイカウントを行います。1枚のQが表向きに現れます。

「少しやっかいな事件ではもう1人の刑事が手伝います」と言って、ふたたびエルムズレイカウントを行い、2枚のQが表向きになったのを見せます。

「3人目の刑事の登場です」と言って、エルムズレイカウントと外観は同一でありながら、つぎのようなフォールスカウントを行います。1枚目と2枚目をふつうに左手に取ります。3枚目のときに右親指でボトムの1枚以外すべてをプッシュして、それらを左手のカードの上に取ります。最後の1枚をそれらの上に取ります。3枚のQが表向きになりました。なお、ブロックをプッシュしたとき、それらを少しアップジョグしておき、カウントののちにカードをそろえるとき、ブロックの下、すなわちボトムから2枚目の上にブレイクを作ります。

「難事件では4人の刑事がチームを組みます」と言って、変則的なアスカニオスプレッドを行います。ブレイクの下2枚をぴったり重ねたまま、ビドルポジションにかけた右手でブレイクの上のカードを右にずらしますが、それらのブロックのいちばん下のカードの裏面に左中指の先を当てて、そのカードがずれたらすぐに左親指をいちばん上のカードの表に当てて、

結果的に図5のような広げたかをするのです。4枚のQが表向きに現れます。



アスカニオスプレッドの終了時点で右手で持っているブロックを、カードを閉じるときにいちばん下にすべり込ませてしまい、そのブロックの上にブレイクを作ります。現在の状態は、上から3枚が表向きのQ、4枚目が裏向きのA、その下にブレイクがあり、5枚目が表向きのQ、その下に2枚の裏向きのAがあります。ブレイクを右での親指に移しながら、パケットを右手のビドルポジションに持ちます。

「2人の刑事は南の方を捜査しました」と言いながら、フェースのQを左手に引いて取りますが、そのときいちばん下のAを左手でバックルし、Qの下に同時に取ります。左手の親指と中指を使って、2枚がしっかり重なるように取ること。2枚を右手のポケットの下に入れてそろえます。つぎのQを左手で引いて取り、やはりポケットのいちばん下に入れます。

「あと2人は北の方を捜査しました」と言いながら、ブレイクの上の2枚を右手で右へずらして2枚のQを見せます。そしてカードを閉じます。以上の操作によって、Q以外にカードがないのを見せると同時に、Aを交互に配置しました。

「操作の結果、3人の容疑者が捕まりました」と言って、7枚を広げ、表向きのQの間に3枚の裏向きのカードが交互にはさまっているのを見せます。広げたままそれらをテーブルに置きます。「選んだカードは何でしたか」とたずねながら、デッキをさり気なく取り上げて、左手のディーリングポジションに表向きに渡します。7枚のうちの裏向きの3枚を1枚ずつ表向きにしていきながら、「捕まったのは名うての泥棒、スリ、詐欺師などでしたが、彼らは真犯人ではありませんでした」と言います。

観客が驚いている間に、デッキを右手に移しますが、いちばん下のAをギャングラズパームします。そしてデッキをわきに置き、左手でケースをつかみますが、パームしているカードをケースの面に重ねます。フタを開き、指先をケースの中にさし入れ、中からカードを抜き出す感じで、親指でケースに重なっているカードを抜き取ります。「真犯人はとっくに捕まって、監獄に入れられていたのです」と言って、そのカードを表向きにします。

ダイレクトコレクターズ

= 加藤英夫、1997年11月9日 =

4枚のAを表向きに右手に持ち、デッキの上に1枚ずつAを取っていきます。そのとき、Aの間に3人の客のカードを1枚ずつはさむにはどうしたらよいか、ということが長い間の課題でした。3枚のAの間に2人のカードを1枚ずつはさむのはかんたんです。3枚のAの下に2枚のカードをアディションし、その2枚の間にブレイクを保っておけば、2枚目のAを取るときにブレイクの下カードをリリースすればよいのですから。

ロイ・ウォルトンの「コレクターズ」の原案では、3枚の間に2枚のカードがはさまるという現象でした。なぜ4枚の間に3枚はさむようにしなかったかと思いましたが、そうするのが困難であったからではないかと、私は勝手に推測しています。

フィル・ゴールドスタインの著書「クラシックタックラー (1976年)」の「コレクターズワンスアゲイン」では、アディションした3枚の間にダブルブレイクを作り、1枚ずつAの間にリリースしています。この方法では、ブレイクの隙間が目立ちますし、ブレイクを作るときにもたつきが生じます。

一方、J.C. ワグナーの 'ツイステッドコレクターズ' では、1枚目のカードを左手小指でプルダウンしています。この方法も、もたつきます。むしろ右親指で1枚ドロップする方がスムーズにいけます。

もたつきがなく、クリーンにできる方法を考え続けてきましたが、この問題は、いちど左手に取ったAを右手のポケットの下に戻す、というアイデアによって解決されました。非常にクリーンに4枚のAを見せることができますので、この技法を行った直後にトップの7枚を広げて結果を見せる、というダイレクトでビジュアルなコレクターズ現象が可能となりました。

* 方 法 *

あらかじめ4枚のAはテーブルに抜き出してあります。3人に選ばせたカードをトップにコントロールします。右手で4枚のAを取りにいくとき、左手はトップの2枚を少し右にずらして、2枚目の下にブレイクを作ります。このとき左手を手前にビベルして、その動作をカバーします。

4枚のAを表向きにトップにのせて広げて見せて、そろえてブレイク上の6枚を取りますが、アディクションした2枚の間に狭いブレイクを作ります。右手を前に示して「4枚のAをよくお見せします」と言いますが、このとき左手はややビベルして、トップカードの下にブレイクを作ります。

1枚目のAをデッキのトップに取ります。2枚目のAをデッキの上を取るとき、左手のブレイク上の2枚を右手のカードの下にスチールします。そして3枚目のAを左手に取るとき、右手のブレイクの下のをすべてを3枚目のAの下に取ってしまいます。右手の2枚を4枚目のAとして左手のカードの上ののせます。

デッキに魔法をかけてから、トップの7枚を広げます。客の選んだカードを言わせてから、Aの間から1枚ずつ抜き出し、当たっていることを見せます。

ダブルクイックサンドイッチ

= 考案者不明 =

これは菅野昭夫氏が高木重郎氏に見せてもらったもので、作者は残念ながらわかっていません。現象はコレクターズと同等ではなく、別々の位置に2組のサンドイッチが現れるという、ダブルサンドイッチ現象です。このあとの作品の土台となったので収録いたしました。

* 方 法 *

4枚のAを抜き出し、トップに表向きにのせますが、上からダイヤ、クラブ、スペード、ハートの順にします。4枚のAを広げますが、その下の裏向きの4枚もプッシュし、4枚のAをそろえる振りをして8枚のカードをそろえて右手に取ります。

「4枚のAを使います」と言って、デッキの上にAを取っていきますが、1枚目のAの下に左小指でブレイクします。3枚取ったら残りの5枚をそれらの上のせて、いかにも4枚のAをそろえる感じで、右手の5枚のうちいちばん下の裏向きの1枚を落とし、上の4枚をテーブルに置きます。そのときAの下の3枚が少しずれるようにします。

ブレイクからダブルカットして、3枚のAをボトムに運びます。そしてボトムから2枚目の上にブレイクを作ります。左親指でデッキの左上コーナーをリフルし、ストップをかけさせます。そこからカードを分けますが、右手は指先を上半分の前端に深くかけるようにして取り上げます。右手のカードのフェースを相手に向け、ボトムカードをおぼえさせます。そして右手のカードを左手のカードの上に置くとき、ボトムプレイスメントによって、右手のボトムカードを左手のブレイクの上にすべり込ませます。相手のカードが2枚の黒いAの間にはさまりました。

こんどはブレイクを作る必要はありません。同じように左上コーナーをリフルし、ストップがかかったところで分け、右手のボトムカードを2人目の客に見せます。そしてボトムプレイスメントでそのカードをボトムに運びます。そしてボトムから2枚目の上にブレイクを作ります。トップから11、2枚のカードをカットして下にまわしますが、ブレイクの間に入れてしまいます。

デッキを左手にチャーリエカットのポジションに持ちます。「こちらの4枚のAが2人のカードを見つけてくれます」と言って、右手でテーブルから4枚のカードを取り上げます。そしてトップから12、3枚のところまでチャーリヤーパスの前半を行い、カードを閉じるまえに上と下のパケットの間に右手のカードを投げ込みます。すぐにカードをリボンस्पレッドします。それぞれのAが客のカードをサンドイッチにはさんでいます。相手のカードを言わせてから、2人のカードを見せます。

クイックコレクターズ

= 菅野昭夫、1997年10月17日 =

これは菅野氏が私に前述の 'ダブルクイックサンドイッチ' を見せようとしたとき、よく記憶していなかったため、サンドイッチではなくコレクターズと勘違いして演じたやり方です。離れた2カ所にサンドイッチが現れるより、1カ所に現れる方がはるかにインパクトが強力です。勘違いが生んだ傑作です。

* 方法 *

スイッチを行って1枚のAと裏向きの3枚をテーブルに置き、3枚の表向きのAをボトムに運ぶところまで、前述の方法と同じです。

ボトムから2枚目の上にブレイクを作ります。リフルしてストップがかかったところでカードを分け、右手のボトムカードを見させ、右手のカードを左手のカードの上のせるときにボトムプレイスメントで1人目のカードをボトムから3枚目に入れます。

ボトムカードの上にブレイクを作り、同様に2人目の客に見せたカードをその間に入れます。そして3人目のカードはボトムに運びます。あとはチャリヤーパスで4枚のカードを投げ入れるのは前述の方法と同じです。すぐにカードをスプレッドして結果を見せます。

技法 コレクティングカウント

= 加藤英夫、1997年11月11日 =

‘3枚のカードを4枚のカードの間にはさむ’、世の中に数百とあるコレクターズのバージョンの中で、必ず中心となっているのが、カードを1枚おきにはさむという技法です。この技法だけでもかなりの数になります。原始的なものを含めて、列挙してみましょう。そのあと、‘コレクティングカウント’の方法を解説いたします。

1. ファローシャフル

もっとも原始的な方法です。この方法の欠点は、1枚おきにシャフルしたのが観客の目に見えるということです。

2. ティルト

4枚のAをトップに置き、3枚目のAの上にブレイクを作ります。1枚目の客のカードデッキの中央に入れると見せて、ブレイクの上にさし込みます。そのあとブレイクを2枚目のAの下に移し、同様に2枚目のカードを入れ、さらにブレイクを移し、3枚目のカードを入れます。

この技法を利用したものとしては、フィル・ゴールドスタインの”スキッターショット”に解説されている’フロイドコレクターズ’があります。

3. ブラフィンサート

デッキをファンに広げ、4枚のAを離ればなれに入れていくと見せて、1枚おきに入れる方法です。

4. アンダーカット

4枚のAがテーブルに置かれていて、3人の客のカードがトップにコントロールされています。1枚のAを表向きにトップに置き、トップの2枚をアンダーカットします。以下、Aをのせて2枚をアンダーカットするのをあと2枚のAで行います。最後のAは中央にくるようにカットします。これでデッキの中央でコレクトされています。

この手法は私が思いついたもので、まだトリックとしては構成していません。Aが1枚ずつ消

えていくのを生かしたプロットが必要です。

5. ダブルリフト

3枚の客のカードがトップにあり、4枚のAがテーブルに置かれています。1枚のAを表向きにしてデッキの手前エンドから中央に差し込みます。半分ぐらい突き出させておきます。2枚目のAを表向きにトップに置き、ダブルリフトしてAと客のカードを突き出ているAの上にさし込み、そろえます。これをあと3回繰り返します。カードを押し込んでスプレッドします。

6. ビドルムーブ

ビドルムーブはカードの間にカードをはさむという目的に適した技法です。しかしこの技法ではブレイクが不可欠であるために、それゆえの制限が出てきます。これから紹介する方法は、ビドルムーブのスムーズな流れを生かし、必要なカードだけを手に持って行う方法です。

* 方法 *

デッキのトップで4枚のAを表向きに広げ、そろえつつ下の3枚をアディクションして7枚を取り上げます。デッキをテーブルに置きます。7枚を右手に持ちますが、ボトムから2枚目の上にブレイクを作り、右親指で保持します。同時にボトムカードを右に3mmほどサイドジョグします。

左手の親指で1枚目のAを引いて取ります。2枚目のAを取りに左手が右手のカードの下に入ったとき、中指の先をジョグされたカードの右サイドにあて、2枚目を引くときにいっしょに引いて、2枚目の下にとってしまいます。

3枚目のAを取るときは、ブレイクの下に1枚を3枚目のAの下に取ります。そして最後の2枚を1枚のごとく置きます。

ダウンタウンコレクターズ

= 加藤英夫、1998年1月20日 =

「下町」というお好み焼き屋で完成したので、この名前になりました。

* 方法 *

表を上に向けて広げていき、4枚のAをフェースに集めます。4枚のAを裏向きにして、下に1枚のカードをアディクションし、5枚を右手のビドルポジションに持ち、天海ムーブで両手を返し、右手の5枚をテーブルに置きます。この5枚は、いちばん上が裏向きのエクストラカードで、その下に4枚のAが表向きになっています。

デッキから3人の客に1枚ずつ選ばせ、トップから3、4、5枚目にコントロールします。トップカードの下にブレイクを作り、右手でテーブルから5枚のカードを取って、トップでそろえる動作のとき、下に1枚の裏向きのカードを加えます。

右手にその6枚をファローシャフルの位置に持ち、その6枚とデッキのトップ部分でアウトファローを行います。すなわち、右手の6枚のトップカードが結果としてトップカードとなり、左手のトップカードが2枚目になるようなやり方をするのです。半分まで押し込んだら、デッキのボトム側から半分ぐらいのカードをカットして、トップ側にまわします。

その結果、図1のように6枚のカードがデッキの中央で、手前に突き出した状態になります。



6枚を勢いよく押し込み、続けて反対側からこちら側に押し込みます。するとAが表向きになって出てきます。4枚のAを図2のようにずらします。



右手を図3のようにかけ替えて、4枚のAを親指で前方に押し込みます。



この段階ではAは左に突き出ています。図4。



左親指でAを右に押し込みます。すると、4枚のAにはさまれている3枚が、デッキの右サイドから突き出ますが、右手の陰になって見えません。

デッキをテーブルの上にリボンスプレッドします。4枚のAにはさまれた3枚のカードは隠れているので、Aの間には何もないように見えます。カードを閉じて、魔法をかけます。そしてデッキをリボンスプレッドすると、4枚のAの間に裏向きのカードがはさまれて現れます。客のカードを名乗らせてから、それらを表向きにして見せます。

*** 備 考 ***

カード当てとしてではなく、4枚目のQを3、4、5、6枚目にコントロールし、4枚のKによって4枚のQを見つけるマジックとして行うこともできます。ファローがアウトになってもインになってもできます。インの場合は上のカード、アウトになった場合には下のカードをペアとします。

プログレッシブコレクターズ

= 加藤英夫、1998年8月5日 =

二川滋夫氏発行の雑誌”マジックハウス”には、日本のクリエイターの創作が多く紹介されています。その第8号(1997年2月)の”ディテクティブコレクターズⅡ”は、高橋麻季男氏の作品を二川氏がハンドリングを修正したもので、コレクターズの興味深いバージョンです。相手が選んだカードと同じ数のカード3枚が、4枚のカードにコレクトされる、というものです。

ふつうの’コレクターズ’は、カードがサンドイッチ状態になるという状態の変化と、何人かが選んだカードが当てられるという、ダブルイフェクトになっています。カードを当てるのを他の現象に置き換える工夫も試されてきました。たとえば表向きの4枚のKの隣りに、同じマークのQがくっつくというマッチングペア現象があります。しかしこれはサンドイッチになる現象が生かされません。あくまでも4枚が3枚をはさむから、サンドイッチの意味が出てくるのです。

そこに前述の作品が登場しました。早速、相手の選んだのと同じ数のカードを見つける、というプロットを借用させていただいて、私が以前から考えていたサンドイッチテクニックを応用して、ひとつのコレクターズが完成しました。まず、離れているカードをサンドイッチ状態にするテクニックを先に説明しておきます。いちおう1枚のカードを当てるトリックとして説明します。

*** 技法 ランニングカットサンドイッチ ***

あらかじめ2枚のJを表向きに出しておきます。

相手のカードをだいたいトップから3分の2の位置にコントロールし、相手のカードの下にブレークを作ります。トップより少しずつカットしてテーブルに置いていき、ストップをかけさせます。ストッ

プがかかったらそこへ1枚目のJを入れます。

さらに少しずつカットしてテーブルのパケットの上ののせていきます。ストップがかかったら2枚目のJのをせます。つぎにブレイクよりカットしてその上ののせます。あと2回位に分けて残りのカードのをせます。

カードを取り上げて広げ、2枚のJが離れているのを見せます。カードをそろえるとき、下のJの下を左小指で、上のJの上のカードの上を右薬指で、ダブルブレイクします。上のブレイクより上のカードをカットしてテーブルに置き、つぎに下のブレイク上のカードの半分ぐらいをカットしてテーブルのカードの上ののせ、つぎに下のブレイクからカットしてのせ、残りをそれらの上ののせます。

スプレッドすると、2枚のJの間に1枚の裏向きのカードがあります。それを抜き出して表向きにして相手のカードを現します。

以下の説明の中で、”ランニングカットサンドイッチを行って”と書かれていたら、上記のやり方によって、表向きのカードの間に1枚の裏向きのカードをサンドイッチ状態にすることを意味します。

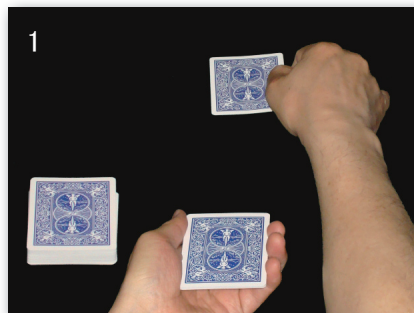
* 方法 *

相手にシャフルさせたデッキを受け取り、表を自分に向けて広げ始めます。すぐにボトムの2枚をグリップスして、「数枚のカードを使います」と言って、ボトムの2枚と同じ数のカードをすべてボトムに集め、数が交互になるように置きます。それらがAとJであると仮定して説明を続けます。

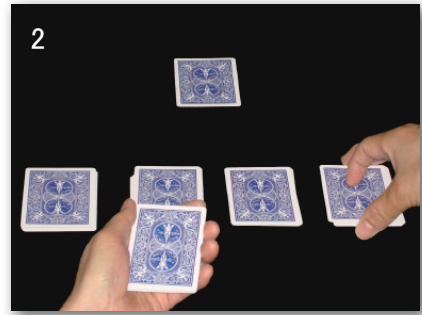
そのあとボトムの5枚を声を出して数え、5枚をそろえる振りをして、さらに後ろの3枚を加えて右手に取ります。左手のカードは裏向きにしてテーブルの左の方に置きます。右手のカードが何枚であるかについて言及してはいけません。この8枚はAとJが交互になっています。

8枚を左手に裏向きに持ちます。トップからカードを取ってボトムにまわしていき、「このようにカードをまわしていきますから、好きなカードでストップをかけてください。ただしこのようにカードを持っているときにかけてくださいね」と言って、カードを取った手を一瞬止めます。

相手がストップをかけたら、「あなたは特別なカードでストップをかけました」と言って、右手のカードをテーブルの中央の前方に裏向きのまま置きます。それがJであるとします。図1。

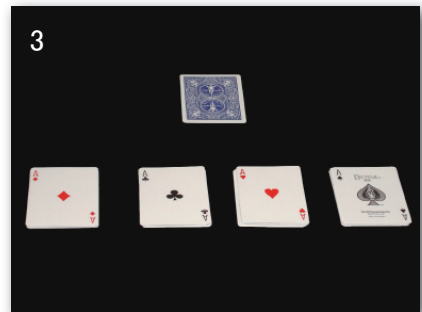


左手で残りの7枚を持ったまま、右手で左に置いてあるデッキを取り、4つのポケットに分けます。図2。



「なぜ特別かという」と言いながら、左手のカードのトップカード(A)を表向きにしますが、そのときその下のカード(J)の下にブレークを作ります。そして下に裏向きのJをくっつけて表向きにしたAをいちばん右のポケットの上へのせます。つぎのカードを表向きにして、同じように下に裏向きのカードをくっつけて取り、右から2番目のポケットの上へのせます。3枚目も同様に右から3番目のポケットにのせます。最後は1枚をいちばん左のポケットにのせます

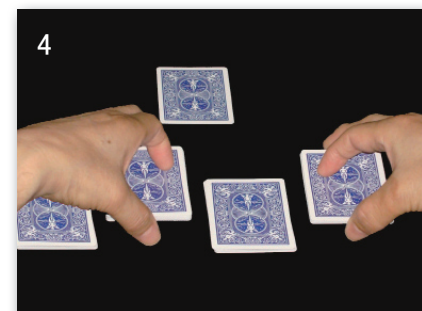
図3の状態になりました。「このようにこちらはすべて同じ数のカードですが、あなたは1枚だけ仲間外れのカードを選びました」と言って、前に置いてあるJを表向きにします。



「魔法で仲間を集めることにしましょう」と言います。いちばん左のポケットを取り、そのポケットの上6、7枚を右手で分けて取り、ビドルポジションに持ちます。左親指を右手のカードのいちばん上のカード(A)に当て、1枚ずつ左手のカードの上を取っていきます。これはかなり速く行い、いかにもシャフルしている感じで行います。表向きのカードはポケットのまん中へんに入りました。このポケットをもとの位置に置きます。

左から2番目のポケットを取り上げて、最初のポケットで行ったのとまったく同じことを行い、もとの位置に戻します。3番目と4番目のポケットについても同じことを行います。以上の動作によって、右の3つのポケットについては、表向きのカードの上に前に置いてあるカードと同数のカードがくることになります。

左から2番目のポケットを左手、4番目のポケットを右手で取り上げ、図4、



それぞれ左から1番目と3番目のポケットの上ののせます。これで2つのポケットになりました。左のポケットを取り上げ、「現在の状態はこうなっています」と言って、カードを広げていき、2枚のAが離れているのを見せます。カードを閉じるとき、ランニングカットサンドイッチができるように、下のAの下と、上のAの上の裏向きのカードの上にブレイクを作ります。そしてランニングカットサンドイッチを行います。もうひとつのポケットを取り上げ、まったく同じようにランニングカットサンドイッチを行います。

そのあと、右のポケットを左のポケットの上ののせてそろえます。「このようにすると変化が起きます」と言って、デッキの上に魔法をかけます。そしてデッキを取り上げ、両手の間にスプレッドし、まず上部で2枚のAの間に1枚の裏向きのカードがサンドイッチになっているのを見せ、さらに広げて下部の方でさらにサンドイッチ状態になっているのを見せ、「これで仲間のカードが2枚見つかりました」と言います。

カードを閉じるとき、下のいちばん下のAの下に小指のブレイク、いちばん上のAの上のカードの上に右薬指のブレイクを作ります。そしてすぐにブレイクを利用してランニングカットサンドイッチを行います。

これで4枚のAの間に3枚のJがサンドイッチになりました。「でも仲間のカードは3枚あるはずですね。もっと魔法をかけましょう」と言って魔法をかけます。デッキをスプレッドして、カードを抜き出し、3枚のJが見つかったことを示します。

* 備 考 *

その後、相手の選んだカードと同じ数のカード3枚がはさまれるというコレクターズが、1984年の時点で存在していたことが判明しました。ウォルト・リー著の“ベストオブクロースアップ”(1984年)に解説されている、ゴードン・ブルースの‘ピンカートンレディース’です。

コレクターズプリディクション

= 加藤英夫、1998年9月28日 =

* 方 法 *

デッキから4枚のKを抜き出して、表向きに広げて持ち、間に裏向きのカードを1枚ずつはさみ、これら3枚が予言のカードであると言います。7枚を閉じてテーブルに置きます。

デッキより3人の客に1枚ずつ選ばせ、トップにコントロールします。トップから1人目、2人目、3人目のカードになるようにします。

トップから2枚目の下にブレイクを作ります。テーブルに置いてある7枚を取り上げ、「4枚の表向きのカードの間に3枚のカードがサンドイッチになっていて、その3枚が予言のカードだと言い

ました。もういちど状態を確認してみましょう」と言って、7枚をデッキのトップにのせ、ブレーク上の9枚を取り上げますが、いちばん下のカードの上に右親指でブレークを保持します。右手が9枚を取り上げたら、すぐにデッキのトップカードの下に左小指でブレークを作ります。

数を数えながら右手から左手にカードを取っていきますが、まず1枚目を左手のカードの上に取ります。2枚目を取るとき、左手のブレークの上の2枚を右手のカードの下にスチールします。3枚目を取ったらその下に左小指でブレークを作ります。4枚目を取るときに、ブレーク上の1枚を右手のカードの下にスチールします。5枚目を取るとき、右手のブレークの下カードすべてを5枚目とともに左手のカードの上に置きます。それらの下にブレークを作ります。6枚目をとるときブレーク上のすべてのカードを右手のカードの下に取り、7枚目で右手のすべてのカードを置きます。6枚目から7枚目にかけては、スピーディにやる必要があります。

もういちど7枚を左手のデッキの上に広げて持ち、1人目の客からカードを名乗らせて、裏向きのうち左のカードを抜いて表向きにして、その客のカードであるのを見せます。2人目の客のカードを名乗らせ、つぎの裏向きのカードを表向きにして2人目のカードであるのを見せます。3人目の客のカードを名乗らせて、残りの裏向きの1枚を抜いて表向きにします。

E・コレクターズ

= 加藤英夫、1999年1月27日 =

これは選ばれたカードを見つける不思議さよりも、表向きの4枚の間に裏向きの3枚が現れる美しさを表現するマジックです。したがって、その結末までの運び方は、それこそ千差万別のやり方があります。最終的な現象がもっともビジュアルに見えるような運び方を説明しますから、もしもあなたの得意な方法にさし替える場合にも、私のやり方のねらいを理解していただきたいものです。

* 方 法 *

3人の客に1枚ずつ選ばせ、結果的に3枚をボトムにコントロールします。

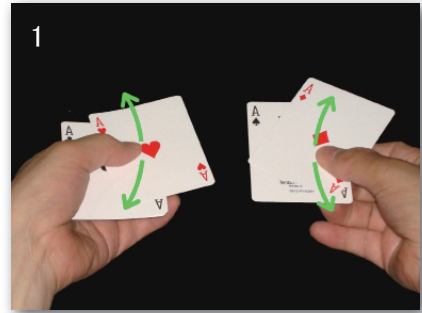
表を自分に向けてカードを広げ、すぐにボトムの3枚を見て、「皆さんのカードを見つけるのに、4枚のAを使います」と言いますが、もしもボトムの3枚にAが含まれていたなら、Kなどそこに含まれていない数を使います。説明上、4枚のAを使うこととします。

4枚のAをアップジョグし、フェースの3枚の下にブレークを作りつつカードを閉じます。アップジョグした4枚を抜いてデッキのフェースにのせますが、そのとき客のカードの表を見せないよう、左手と右手の返し方のタイミングに注意のこと。

フェースの3枚を広げて、4枚のAを見せます。それらをそろえるとき、ブレークの上の7枚をそ

ろえて右手のビドルポジションに取り上げます。左手でデッキを裏返して、テーブルの前方中央に置きます。

7枚を左手に移し、よくそろえ、上の2枚を右手に順番が変わらぬように右手に取り、左右の手で2枚のAをウィグルします。ウィグルとは、親指をカードの上で、中指をカードの下で動かすことにより、2枚のカードを何回かすべらす動作です。図1。



ウィグルは、カードの間に何も無いことを強調する目的で行われます。左手は隠された3枚がずれないようにやってください。手が静止していないので、隠された3枚に気づかれる心配はありません。ウィグル中に、両手を返してカードの裏面を見せてもかまいません。ウィグルの動作のあと、カードの表を上にして、右手の2枚を左手の2枚の下に入れてそろえます。

カードを裏向きに左手に持ちます。「3人のカードをこちらに飛ばします」と言って、デッキからカードをつかんで左手のカードに投げ込むまねをします。最初は上から投げ込み、「1枚目は上に」と言います。2枚目はまん中に投げ込むまねをして、「2枚目はまん中に」と言います。3枚目は下から投げ込むまねをして、「3枚目は下に入れます」と言います。

「どうなったか見てみましょう」と言って、カードに注目を集めます。トップカードをふつうに取り、表向きにしてテーブルにディールします。2枚目はセカンドディールして先に置いたカードの上に裏向きに置きますが、少し右にずらして置きます。3枚目はふつうに取って表向きに置き、4枚目はふつうに取って裏向きに置き、5枚目はセカンドディールして表向きに置き、6枚目はふつうに取って裏向きに置き、7枚目を表向きに置きます。

結果的に図2のように7枚が少しずつずれて並ぶようにします。



1人目のおぼえたカードを名乗らせ、いちばん右の裏向きのカードを抜いて表向きにします。2人目のカードを名乗らせ、2枚目の裏向きのカードを表向きにします。3人目のカードを名乗らせ、最後の裏向きのカードを表向きにします。

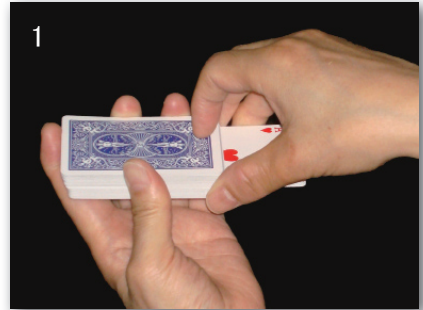
魔法のフォーク

= 加藤英夫、1999年1月26日 =

* 方法 *

「カードはフォークの働きもするんです。このように4枚のカードを1組の中にさし込む」と言いながら、トップの4枚を表向きにして広げて見せてから、そろえてデッキの中ごろにさし込みます。

ファローシャフルのように1枚置きに入れるようにします。図1。(この図は左横から見た図です)。「このようにカードを引き抜くことができます」とセリフを続けて、図1の形のまま、はさんだカードごと右に引き抜きます。



そして図2のように広げて、1枚おきに裏向きのカードがはさまったのを見せます。



以上は、カードが1枚おきにはさまることを例示する動作です。裏向きのカードを引き抜き、表向きのカードを裏向きにしてそろえます。

3人の客に1枚ずつ選ばせ、何らかの方法で3枚をトップにコントロールします。トップから1人目、2人目、3人目のカードとなるようにします。

表を自分に向けて広げ始め、トップの3枚をグリンプスし、それらに含まれない数のカードを4枚、たとえば4枚のAをアップジョグします。カードを裏向きにして、アップジョグした4枚を抜いて表向きにトップにのせます。ここで4枚のAを見せてそろえるときに、下の裏向きの3枚もアディションして取り、デッキを相手に渡して持たせます。右手の7枚でコレクティングカウント(18ページ)を行い、4枚のAの間に3人の客のカードをはさみ、7枚を右手に持ちます。

デッキを相手によくシャフルさせます。3人のカードがどこにいったかわからなくなったと言います。デッキを左手に受け取り、ディーリングポジションに持ちます。親指の付け根で中央あたりに割れ目を作り、右手のカードをいかにもファローするようなかっこうで、割れ目の中にさし込みます。ウィーブするのではなく、割れ目に右手の7枚がまとまって入るように押し込むのです。

半分ぐらい押し込んだ図 3 の状態から、



さし込んだカードのいちばん上の 1 枚だけを、図 4 の位置まで手前にずらします。



図 4 の位置まできたら、右手の親指と中指で、いまずらした 1 枚と他の 6 枚の重なっている部分をつかみ、それらを手前に引き抜きます。いかにも突っ込んだ 4 枚の A を引き抜いたように見せるのです。

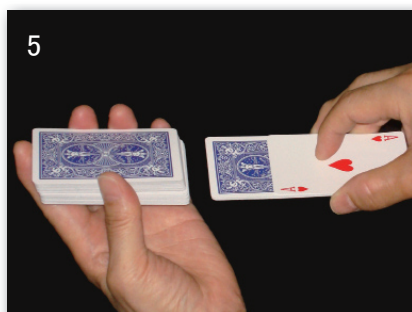


図 3 ~ 図 5 は左横から見た図です。

左手のデッキをテーブルに置き、右手のカードを左手に移し、右手で上に突き出ているかっこうの裏向きのカードを下に押し込みます。図 6。



そしてすぐに 7 枚を広げます。1 人目の客からカードを名乗らせ、3 枚の裏向きのカードのうち、いちばん左のカードを抜いて表向きにして見せます。2 人目のカードを名乗らせ、つぎの裏向きのカードを表向きにします。3 人目のカードを名乗らせ、最後の裏向きのカードを表向きにします。

複利増殖法

= 加藤英夫、1999年7月2日 =

* 方法 *

「4枚のAを使います」と言って、シャフルされたデッキを表向きに広げ、まずAをどれでもトップ近くに運ぶようにカットします。トップ近くにAがあるのが確認できたら、このカットは不要です。

Aが出るたびにアップジョグしていきませんが、その操作とは別に、フェースから密かにカウントしていき、Aをカウントに含めずに、フェースから12枚目のカードをダウンジョグします。そしてさらにそのあと11枚のカード(Aをカウントせずに)をカウントし、そのカードの裏に右手人さし指を当てます。さらにそのあと12枚のカードの裏に、右手中指の先を当てます。

左手でアップジョグした4枚のAを抜いて、表向きにテーブルに置きます。続いて、中指で押さええているところからカードを分け、テーブルの左の方に置きます。つぎに人さし指で押さええているところから分けて、最初のパケットの右に置きます。つぎはダウンジョグカードの下で分け、2番目のパケットの右に置きます。残りのパケットをそれらの右に置きます。左のパケットから、13枚、12枚、11枚、12枚となっています。

説明上、左のパケットから順に、パケット1、パケット2、パケット3、パケット4と呼びます。1枚のAを取り上げ、裏向きにしてパケット4の上ののせさせます。相手にパケット3から好きな枚数をカットして、パケット4の上ののせさせます。つぎにAをパケット3にのせ、相手にパケット2からカードをカットしてのせさせます。3枚目のAをパケット2にのせ、パケット1からカットしてその上ののせさせます。最後に4枚目のAをパケット1にのせさせます。

パケット1を取り上げつつ、トップから4枚目の下にブレイクを作ります。ブレイクを右親指で継承して、そのパケットを右手のビドルポジションに持ち、そのパケットをパケット2の上に重ね、それらを取ってパケット3に、そしてそれらをパケット4に重ねて取り上げます。最後にブレイクからダブルカットします。

トップから4枚目と5枚目のカードを表向きにして、「この2枚でAを見つけます」と言って、カードを閉じます。「珍しいシャフルのやり方を使います」と言って、カードを26枚と26枚に分け、アウトのファローシャフルを行います。カードを両手の間に広げ、「このシャフルでは、カードとカードの間に1枚のカードがはさまります」と言って、2枚の表向きのカードの間に1枚の裏向きのカードがはさまっているのを見せます。そしてそのカードをその位置で表向きにして、カードを閉じます。

「もういちどサンドイッチシャフルするとどうなるでしょう」と言って、アウトのファローシャフルを行います。そしてカードを広げて、3枚の表向きのカードの間に2枚の裏向きのカードがはさまったのを見せます。その2枚をその位置で表向きにして、カードを閉じます。

「もういちどやってみましょう」と言って、アウトのファローシャフルを行います。そしてカードを広げます。「こんどは4枚の裏向きのカードがはさまりました」と言って、サンドイッチ全体の9枚を抜き出して、他のカードはテーブルに置きます。

9枚から裏向きのカードをアップジョグします。「4枚のカードがはさまったということは、何か思い当たることはありませんか。そうです、4枚のAが見つかったのです」と言って、アップジョグした4枚を抜いて表向きに広げます。

ポピュレイス

= ピーター・ダフィ、“コバートコンセプト”、2000年 =

この作品についてピーター・ダフィは、ロイ・ウォルトンの‘コレクターズ’の操作が複雑であることに対して、徹底的に簡略化を試みたものであり、彼の実演レパトリーでかなり演じてきたものだと述べています。

* 方法 *

4枚のAを抜き出して、2枚ずつ2組として表向きにテーブルに置きますが、一方は赤が上で黒が下、他方は黒が上で赤が下とします。

3人の客にカードを選んでおぼえさせ、返してもらったらトップにコントロールします。その3枚の下にブレークを作ります。

赤のAがあるペアを右で取り、デッキのトップに置き、ブレークの上の5枚を取り上げます。続けて上の1枚をトップに引いて取り、残りの4枚をすぐその上に置きます。これは、2枚のAを1枚ずつトップに置いて見せた、という動作のように見せかけます。（「2枚のAの間には何もありません」というようなセリフを言いながらやるとよいと思います）。

すぐ続けてトップの2枚を取り、テーブルに置きます。ケースの上に置いておかまいません。ずれて表向きのカードが見えないようにします。そのとき、デッキのトップカードの下にブレークを作ります。

右手でもう1組のAのペアを取り、デッキの上ののせて、まえと同じことをやります。すなわち、3枚を右手でつかみ、上の1枚をデッキの上に引いて取り、その上に右手の残りのカードをのせてそろえます。

テーブルに置いてある2枚を取って、「Aを全部重ねると、どんなことが起こると思いますか」と言いながら、取り上げた2枚をデッキの上に置きます。客が何と答えたにかかわらず、「奇蹟が起こるんですよ」と言います。

デッキの上で指を鳴らしてから、トップの7枚を広げ、コレクト状態になったのを見せます。それから客の選んだカードを名乗らせてから、1枚ずつ現していきます。

おっと失礼！

= 加藤英夫、2012年12月21日 =

前述の'ポピュレイス'では、Aを2枚ずつ2組に分けて操作を行っていますが、そのことが現象的に生かされていません。その部分を修正したバリエーションです。年代順に反していますが、ダフィ作品との関連で、ここに収録いたしました。

* 方法 *

4枚のJを抜き出して、2枚ずつ2組として表向きにテーブルに置きますが、一方は赤が上で黒が下、他方は黒が上で赤が下とします。

3人の客にカードを選んでおぼえさせ、返してもらったらトップにコントロールします。その3枚の下にブレイクを作ります。

赤のJがあるペアを右で取り、デッキのトップに置き、ブレイクの上の5枚を取り上げます。続けて上の1枚をトップに引いて取り、残りの4枚をすぐその上に置きます。「2枚のJの間には何もありません」と言います。

続けてトップの2枚を取り、テーブルに置きます。ケースの上に置いてかまいません。ずれて表向きのカードが見えないようにします。そのときデッキのトップカードの下にブレイクを作ります。

右手でもう1組のAのペアを取り、デッキの上ののせて、まえと同じことをやります。すなわち、3枚を右手でつかみ、上の1枚をデッキの上に引いて取り、その上に右手の残りのカードをのせてそろえます。「こちらのJの間にも何もありません」と言います。

右手でテーブルの2枚を取り上げ、「まずこちらのJを使って選ばれたカードを現します」と言って、デッキの上に置き、魔法をかけます。

図1のように広げて、表向きのJの間に裏向きのカードが現れたのを見せます。「はい、1枚現れました」と言います。左親指は、赤のマークを隠しています。



広げたカードをそろえて、上の2枚をテーブルに置きます。「こんどはこちらです」と言って、デッキに魔法をかけます。それから図1と同じような広げ方をして、「これで2枚目が現れました」と言います。広げたカードをデッキの上で閉じます。

「これで2枚の選ばれたカードを見つけることができました。おっと失礼、選んでいただいたのは3枚でしたね。ではやり直します」と言って、テーブルから2枚を取ってデッキの上に置き、魔法をかけます。

トップの7枚を広げて、コレクト状態になっているのを見せます。7枚を右手に取り、デッキはテーブルに置きます。

そして客に1枚ずつ名乗らせ、その客のカードを抜いて表向きにして見せていきます。

スローイングコレクターズ

= 加藤英夫、2000年1月31日 =

これは一部分のプロセスが、前述のジェニングスの方法に影響を受けています。カードを投げてはさむという現象は、エド・マルローの'Ollram Catches A Card' GENII (1987年11月号)の中で使われている技法を借用しています。

* 現象 *

マジシャンはあらかじめ4枚のAを表向きにテーブルに置いておきます。それから3人の客に1枚ずつ選んでおぼえさせ、デッキに返させます。マジシャンは4枚のAを右手で取り上げ、左手で保つデッキの上に4枚を勢いよく投げます。すぐに左手がデッキを右方に投げると、左手に7枚のカードが残ります。これらを広げると、表向きに4枚のAの間に裏向きのカードが1枚ずつはさまっています。それらを抜き出して表向きにすると、3人の選んだカードです。

* 方法 *

4枚のAを抜き出して、デッキのトップで表向きに広げて見せ、そろえるときに下に裏向きのカードを3枚加えます。さらに1枚の裏向きのカードを取り、右親指でそのカードの上にブレークを保持します。上から3枚の表向きのカードをデッキの上に引いて取り、残りのカードをその上でそろえて、右親指のブレークより上の4枚をテーブルに置きます。テーブルに置かれたのは、表向きのA1枚の下に、裏向きのカード3枚です。他の3枚のAは、トップから2枚目以降にあります。

表向きのAを見せないようにカードを広げて、3人の客に1枚ずつ選ばせます。客が見ておぼえたら、デッキをまん中へんで分け、3人の客のカードを結果的に一カ所に返させ、その上にブレークを作ります。

「よくカードを混ぜます」と言って、ブレイクから分けてファローシャフルしますが、3人のカードがトップから2、4、6枚目に入るようなやり方をします。そのあとナチュラルブレイクを利用して、トップから7枚目の下にブレイクを作り、そこからカットしますが、間にブレイクを保持します。ブレイクより下の1枚を右親指で持ち上げて、ブレイクを1枚下にずらします。ブレイクから下の6枚は、表向きのAと3人の客のカードが交互になったものです。

左手にデッキを持ち、右手でテーブルに置いてあった、4枚のAと思われるパケットを取り上げます。右手で4枚をデッキの上に投げ、続けて左親指をトップの1枚のAにあてて、デッキを右に投げ飛ばします。左手はブレイク下の6枚とトップの1枚を保持します。左手のカードを広げると、4枚の表向きのAの間に、裏向きのカードが1枚ずつはさまっています。3人のカードを名乗らせ、はさまっているカードを見せます。

サドンコレクターズ

= 加藤英夫、2001年11月12日 =

* 方法 *

表を自分に向けてデッキを両手の間に広げ、「あとで使うカードを4枚抜き出します」と言って、4枚のAをアップジョグし、それらを抜いてそろえ、表向きにテーブルに置きます。

3人の客に取らせたカードをトップにコントロールします。以下の説明では、トップから順に、1人目のカード、2人目のカード、3人目のカードがあるものとして説明します。他の順になるようなコントロール手法を使う場合は、それに応じて、最後に現す順を考慮してください。

右手でテーブルから4枚のAを取るとき、左手はトップの2枚の下にブレイクを作ります。4枚のAはそろえてビルドポジションに持ちます。

1枚目のAをトップに引いて取ります。2枚目を引いて取るとき、ブレイクの上の3枚を右手のカードの下にスチールします。間にブレイクを作る必要はありません。

3枚目を取るべく右手のカードをデッキの上に運ぶとき、図1のように右手のボトムカードを左指の先で右にプッシュします。

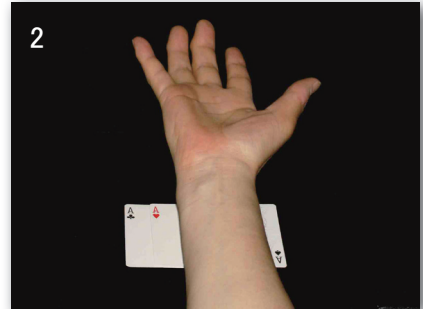


そして、3枚目を取るときにその右にプッシュしたカードも同時にデッキの上に取ります。そして右手に残っているすべてのカードを4枚目として左手のカードの上に置きます。それら3枚の下にブ

レークを作ります。以上によって、トップから1、2、4、6枚目が表向きのAとなります。

トップのAを取ってテーブルに置きます。つぎの2枚をダブルで取り、テーブルのカードの上に、右に2cmぐらいずらして置きます。あと2回同じようにダブルで取って、2cmぐらいずつずらしてテーブルのカードの上に置きます。

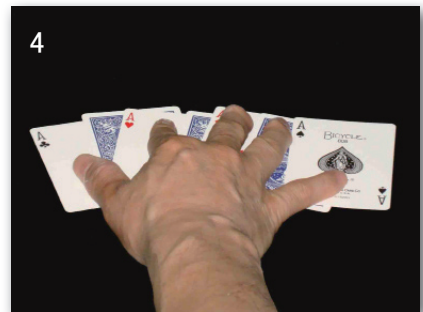
右手の平を上に向けてテーブルのカードの15cmぐらい上空にかまえます。図2。



「ワン・ツー」とかけ声をかけ、右手を返して図3のように握り、



「スリー」と言いながら右手をカードにたたきつけると同時に、右手の指を開き、図4のようにカードを広げます。



はさまっている裏向きのカードのうちの、いちばん左のカードを抜いて、1人目の客のカードを名乗らせてから、それを表向きにして現します。つぎは中央の裏向きのカードを取り、同じように2人目の客のカードを表向きに現します。そして3人目の客のカードを同じように現します。

びっくりマック

= 加藤英夫、2012年12月21日 =

* 方 法 *

2人の客に1枚ずつ選ばせ、おぼえたら返してもらい、トップとボトムにコントロールします。ディーラーをスタートして、「このようにカードを置いていきますから、かなり置いたら適当なところでストップをかけてください」と言います。ストップしたら、最後に置いたカードを表向きにして、その上に残りのカードを重ねます。

それをあと2回やりますが、3回目にストップしたところのカードを表向きに戻すとき、左上コーナーをつかんで返しながらか、そのコーナーをクリンプします。そして残りのカードを上重ねます。

デッキを取り上げて両手の間に広げ、表向きの3枚が分散しているのを見せて、「表向きに入れたカードはハンバーガーを作るためのパンなのです」と言います。カードを閉じるとき、下から2枚目の表向きのカードの上のカードの上と、下から3枚目の表向きのカードの上のカードの上に、左小指と薬指でダブルブレイクを作ります。

「ハンバーガーを完成させます」と言って、上のブレイクより上のカードのうち、半分ぐらいをカットしてテーブルに置き、つぎにそのブレイクの上のカードをすべてカットして、テーブルのカードの上に置きます。

つぎは下のブレイクより上のカードをすべてカットして、テーブルのカードの上に置きます。そしてつぎはトップの2枚を取ってテーブルのカードの上に置きます。

そしてクリンプカードの下でカットして、テーブルのカードの上に置き、残りのカードをそれらの上ののせてそろえます。

両手のデッキの上にかざし、「このまま少し時間をおくと、ハンバーガーが完成します」と言います。

デッキを両手の間に広げて、表向きの3枚の間に裏向きのカードがはさまれたのを見せ、そしてそれら5枚をアップジョグして抜き出し、他のカードはわきに置きます。それぞれの客の選んだカードをたずね、そのカードを抜き出して表向きにして見せます。

なお、2人の客をコントロールしたとき、トップにコントロールした方が、最後に5枚を広げたとき、それは右の裏向きのカードとなります。

レスキュー隊

= 加藤英夫、2012年12月22日 =

“デスーザズディセプション”(2001年)の中に、マーク・デスーザの‘コレクションエージェンシー’というコレクターズトリックが解説されています。解説の冒頭で彼は、たいていのコレクターズのやり方が、1枚おきにする部分に複雑なプロセスが必要な点が、プロマジシャンとして使いにくい点だと述べています。そして彼が解説しているバージョンでは、1枚おきにはさむ操作がシンプルになっています。つぎのようなやり方です。

2人の選んだカードをトップとボトムにコントロールします。あらかじめテーブルに抜き出しておいた赤いA2枚をトップに置いて、トップの選ばれたカードをマルローの手法でサンドイッチ状態にします。やはりあらかじめ置いてあった黒いAをボトムに入れるとき、ボトムの選ばれたカードをバックルして、そのカードを2枚の黒いAの間にはさんでしまいます。

ここで3人目の客に向かってデッキをリフルしてストップをかけさせ、上半分のボトムカードを見せておぼえさせ、上半分を戻すときにボトムプレイメントを行います。

そのあとパスかカットすれば、3人のカードは4枚のAにコレクト状態になるので、スプレッドして結果を見せます。

プロセスをシンプルにするという考え方には大賛成ですが、いかんせんトップとボトムに2枚ずつ表向きのAを置いて、その状態でリフルして3人目に選ばれるというのが、たいへんアブノーマルな感じがします。そのひとつの点によって、デスーザのこのトリックは作品として収録しないことにいたしました。

しかしながらデスーザのこのトリックにおける、トップとボトムにサンドイッチ状態があるものを、パスもしくはカットすることによって、コレクト状態にするという発想が、以下の作品を思いつかせてくれました。

* 方法 *

あらかじめ4枚のJを抜き出して、2枚ずつに分けて、表向きにテーブルに置いておきます。一方は赤が上で黒が下、他方は黒が上で赤が下とします。抜き出して置くとき、「これらのカードがどんな働きをするかは、あとでお話いたします」と言います。

3人の客に1枚ずつ選んでおぼえさせ、デッキに返させてからシャフルして、3枚ともトップにコントロールします。「いまお選びになったカードが、山で遭難した3人だとします。そしてこちらのカードがレスキュー隊です。これがaチーム、こちらがbチームです」と、2組のペアを指さしながら言います。そのときトップカードの下にブレイクを作ります。

どちらかのペアを取り上げてデッキのトップに置き、ブレイク上の3枚を右手に取り、上のカードを引いてデッキの上に取り、右手のカードをその上に置くとき、デッキの上から2枚をほんの少し右にずらし、そろえるときに上から4枚目の下にブレイクを作ります。

「このレスキューチームが遭難者を捜しにいきます」と言って、リフルパスの要領でブレイク上の4枚をパスします。

「もう1組のチームも出動します」と言いながら、残りの2枚のJを右手で取り上げますが、左手はトップカードの下にブレイクを作ります。そして右手の2枚をトップに置いて、ブレイク上の3枚を取り上げ、上のカードを引いて取り、その上に残りの2枚をのせます。

こんどはリフルパスによって、デッキの中央あたりでパスします。「このチームも捜しにきました」と言います。

「2組のレスキューチームは別々に行動したわけではありません。連携して搜索したのです。その結果、このように遭難者を見つけることができました」と言って、デッキをリボン Spredd します。

コレクト状態の7枚を抜き出して、他のカードはそろえてわきにどけます。1人1人のカードをたずねながら、裏向きのカードを抜き出して、表向きにして見せていきます。

* 備 考 *

私はこの作品を 'コレクターズ' 特集の最後に解説するのに適切だと思ったのは、この作品のように、選ばれたカードをコレクト状態にすることに対して、演出で装飾しているということが、とくに 'コレクターズ' を演じる上で重要だということです。

'コレクターズ' をまったく演出なしに演じたとしたら、これほど無味乾燥な現象はありません。もちろんこの作品のように、遭難者をレスキューするという明確なストーリーを語りながら演じるというのが、適切でない状況、演技者のキャラクターに合わないということもあります。

そこで、たいていの 'コレクターズ'、演技者のキャラクターに合うような、標準的なセリフを紹介して、当書を締めくくりたいと思います。以下は、ゲリー・カーツの 'アンエクスpekテッドアクト' (1990年)、解説されている、カーツの 'オールトゥギャザー' というコレクターズ作品に使われているセリフです。作品としては収録いたしませんでしたが、このセリフだけでも記録しておくのに十分な価値があるものです。

「人間というものは、色々な物を集めるという習癖があります。スタンプやコインを集める人もいます。金持ちの人は年代物の車やワイン、はたまたたくさんの会社さえも買い集める人もいます。じつはカードというものも、そのようなコレクション趣味があるのです。何を集めるかという、カー

ドを集めるのが好きなのです。いったいどのようなことかをお目にかけてみましょう」。

このセリフを言ったあとは、とくに操作中に何かを言わなくても、演じることができます。このようなことを言うか言わないか、それはあなたが演じることがパズルにとどまるか、マジックの雰囲気醸し出すかの違いとなってくると思います。

*** 余 談 ***

2012年12月17日に、マジックカフェにデレク・カスティーヨというメンバーからつぎのような投稿がありました。

3人の客に1枚ずつ選ばせてサインさせ、それらをデッキに返させてシャフルしたあと、あらかじめ置いてあった4枚のAを表向きにデッキに入れて、デッキをシャフルします。それからデッキをスプレッドすると、表向きのAの間に1枚おきに選ばれたカードがはさまっている、というマジックをやりたいのですが、このようなやり方を解説している本かDVDはありませんか。

この質問に対していつもながら、いくつかのバージョンの紹介があったあと、スティーヴン・ユーウェルがつぎのように投稿してきました。

客にサインさせるというのは、このマジックを弱めてしまうことになると思います。それだけの時間と手間をかけることが、不思議さを強める働きをするとは思えません。

また選ばれたカードをデッキに入れてからシャフルすることや、4枚のAを入れてからシャフルすることが、効果を高めるとも思いません。それどころか、シャフルすることによって1枚おきにしたのではないか、という疑念を感じさせる可能性があるのです。

ユーウェルのこの回答は、'コレクターズ'にかぎらず、どのようなカードマジックにも関係する重要なアドバイスであると思います。

'ACAAN'をシャフルしたデッキで演ずることが効果を高めない、ということはどこかに書きました。コンビンシングコントロールでカードをボトムに運んで置いて、そのあとデッキをシャフルしてしまう、というようなことについても書きました。

より不思議にしようとする行為が、逆に不思議さを弱めることになる、ということがあることの戒めとして、ユーウェルのアドバイスをここに記録しておくことにいたしました。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 29 号

発 行 2014 年 7 月 4 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

